歯周疾患（慢性辺縁性歯周炎）患者の 初診時診査項目に関する検討

第1報 歯周疾患患者質問調査表について

上野 益卓 岡部 秋彦 玉井 憲二 佐藤 昌司
三上 格 河野 昭彦 深井 浩一 高橋 克弥
大滝 晃一 長谷川 明

日本歯科大学新潟歯学部歯周治療学教室

（主任：長谷川明教授）

（昭和60年6月20日受付）

Studies about the State of the Periodontal Patients in the Initial Visit

1. The Statistical Observations on Questionnaires

Masutaka UENO, Akihiko OKABE, Kenji TAMAI, Masashi SATO,
Itaru MIKAMI, Akihiko KONO, Koichi FUKAI, Katuya TAKAHASHI,
Koichi OTAKI and Akira HASEGAWA

Department of periodontics, Nippon Dental University, Niigata

(Chief : Prof. Akira HASEGAWA)

We are investigating about the state of the periodontal patients in the initial visit. Subjects were 200 patients (100 males and 100 females) who visited our clinic and were diagnosed as chronic marginal periodontitis.

In this paper, questionnaires of the periodontal patients in the initial visit were investigated. This questionnaire consisted of the following subjects : (1) chief complaint, (2) food and habit, (3) experience of periodontal treatment, (4) concept of oral hygiene, (5) desire for treatment.

The results of the questionnaire were analyzed with age, sex and advanced stage of the disease and the following results were gained :

1. The patients of 41~50 years old were the most

predominant and 60% of them were in advanced stage of the disease.

2. As to chief complaint, food impaction was the most predominant.

3. Sex differences were recognised as to habit of one side mastication, much eating of sweet food, smoking and much eating of solid food.

4. 66.0% of the patients had experienced scaling.

5. The patients who brushed their teeth two times per day were most predominant, and then once, and the least was three times.

6. The patients who exchanged the tooth brush every two months were the most predominant, and the percentage of patients who have experienced tooth brushing instruction was 34.0%.

Key words : Questionnaire for periodontal patient, Chronic marginal periodontitis, Chief Complaint

本論文の要旨は、日本歯科大学歯学会3月例会（1984年3月16日）において発表した。

要旨：当科では、初診時における歯周疾患患者の状態を把握することを目的として、当科に来院し、慢性辺縁性歯周炎と診断された患者、男性 100 名、女性 100 名、計 200 名を対象として検索を行っている。今回は第一報として、初診時における歯周疾患患者質問調査表をもとに、主訴項目、嗜好品および習慣、過去における治療の有無、口腔衛生観念、治療に対する熱意と年齢、性別、疾患の進行度との関係について検索し、以下の結果を得た。(1) 来院患者は、40 歳代が多く、また、重度のものが約 60% を占めた。(2) 主訴項目では、食片圧入が最も多かった。(3) 片側咀嚼、甘味物の摂取、喫煙、硬固物の摂取に男女差が認められた。(4) 来院患者の 66.0% が歯石除去を経験していた。(5) ブラッシング回数は、1 日 2 回、1 日 1 回、1 日 3 回の順であった。(6) 歯ブラシの交換時期については、2 ヶ月が多く、ブラッシングの指導を受けたものは 34.0% であった。

索引用語：歯周疾患患者質問調査表、慢性辺縁性歯周炎、主訴

緒 言

歯科領域における 2 大疾患は、う蝕と歯周疾患とされている。そのうち、う蝕は疼痛、咀嚼障害、発音障害、審美性の不良などのために、患者自身で自覚し積極的に治療施設を訪れることが多い。

しかしながら、歯周疾患は、ある程度進行した状態で気づくか、あるいは、他の疾患で歯科医のもとを訪れ、そこで指摘されはじめて認識する場合も、少なくない。

近年、テレビ、新聞などのマスコミによる口腔衛生思想の普及により、初期の段階で来院する患者も増加する傾向を認めるが、その反面、実質欠損を伴わない疾患ということで放置している患者も依然として見られる。

歯周疾患患者がどのような状態で来院するのかわかることは、歯周治療学上重要である。

当科では、慢性辺縁性歯周炎罹患患者がどのような状態で、来院するのかわかる把握すべく検討を進めているが、今回は、その第一報として初診時における歯周疾患患者質問調査表をもとに検討した結果について報告する。

調査対象および調査項目

1. 調査対象

昭和 57 年 6 月より昭和 59 年 2 月までの間に、日本歯科大学新潟歯学部附属病院歯周治療科に来院し、慢性辺縁性歯周炎と診断された患者のうち資料の整っている男性 100 名、女性 100 名の計 200 名を調査対象とした。

2. 調査項目

当科では診査の最初の手順として、患者に歯周疾患患者質問調査表(表 1)をわたし記入してもらっているが、これにより、主訴となるポイント、嗜好品・習慣、

過去における治療の有無、口腔衛生観念、治療に対する熱意などの把握が可能である。調査項目は、この歯周疾患患者質問調査表に記載されている項目とした。

結 果

1. 来院患者の年齢性別分布について

来院患者は 40 歳代が最も多く 36.5%、次いで 50 歳代 29.0%、30 歳代 24.5% と、30 歳～50 歳代で全体の 90% を占めた(図 1)。さらに性別では、ともに 40 歳代が最も多く、男性では、40 歳代 16.0%、30 歳代、50 歳代

図 1 患者の年齢別分布

表 1 歯周疾患患者質問調査表

氏 名 _____

次の項目のうちあてはまるものの番号を丸で囲んで下さい

- 1 歯ぐきがむずむずする

2 歯ぐきから血がでる

3 歯ぐきからうみがでる

4 歯ぐきがはれている

5 歯がぐらぐらする

6 歯ブラシを使うと歯ぐきから血がでる

7 体調が悪い時に歯ぐきかはれる

8 歯ならびが悪くなった

9 固いものがかみにくい

10 歯の間に食物がはさまる

11 口が臭いと思う

12 口が臭いと人に言われる

13 口の片側だけで物を食べる

14 口で呼吸をすることがある

15 歯ぎしりをする

16 つまようじを使う

17 たばこをすう

18 食べ物に好ききらいが多い

19 固い食べ物を好む

20 甘い食べ物を好む
- 21 今までに歯石をとってもらったことがある

22 今までに歯ぐきの治療を受けたことがある

23 歯は1日に1回みがく

24 歯は1日に2回みがく

25 歯は1日に3回みがく

26 歯ブラシは1ヶ月位でとりかえる

27 歯ブラシは2ヶ月位でとりかえる

28 歯ブラシは3ヶ月位でとりかえる

29 歯ブラシのとりかえはあまりしない

30 歯ブラシを買う時に硬さに注意している

31 特殊な歯みがき剤を使っている

32 口の中を清掃する器具を使っている

33 歯みがき法を教わったことがある

34 治療のためにいつでも通院できる

35 治療のための通院は週に2回位

36 治療のための通院は週に1回位

37 あまり通院できない

38 ひどく悪いところだけを治したい

39 予防も含め治療を受けたい

日本歯科大学新潟歯学部附属病院歯周治療科

15.0%であり、女性では、40歳代20.5%、50歳代14.0%、30歳代9.5%の順であった（図2）。

5歳毎に来院患者を区分してみると、40歳代前半、50歳代前半、30歳代後半の順で男女とも、40歳代前半が最も多かった。

2. 疾患の進行度について

当教室においては、慢性辺縁性歯周炎の進行度を、歯周ポケットの深さと、動揺度により、3段階に分類している。すなわち歯周ポケットの深さが1～3mm、動揺が1度の軽度、歯周ポケットの深さが4～6mm、動揺が2度の中等度、歯周ポケットの深さが7～12mm、動揺が3度の重度である（表2）。これをもとに被検者を歯周ポケットおよび動揺度の最大値が属している進行度に組入れ分類した。その結果軽度は、7.5%、中等度35.0%、重度

表 2 疾患の進行度の判定基準

	歯周ポケットの深さ（mm）	動揺度
軽 度	1～3	1 度
中 等 度	4～6	2 度
重 度	7～12	3 度

57.5%であった（図3）。また、それぞれを、男女別に見ると、軽度では、男性40.0%、女性60.0%、中等度では、男性47.1%、女性52.9%、重度では、男性53.0%、女性47.0%であった（図4）。疾患の進行度と年齢についてみると、軽度では、30歳代が最も多く、以下40歳代の26.8%、50歳代の20.1%、60歳代の13.4%と増齢とともに減少している。中等度では、40歳代が36.8%、30歳代、50歳代は、25.6%で、重度では、40歳代37.4%、50

図 2 患者の性別分布

図 3 疾患の進行度との関係

図 4 性別にみた疾患の進行度との関係

るが、これを (1) 歯ぐきがむずむずするは、違和感、(2) 歯ぐきから血がでる、(6) 歯ブラシを使うと歯ぐきから血がでるは、出血、(3) 歯ぐきからうみがでるは、排膿、(4) 歯ぐきがはれている、(7) 体調が悪い時に歯ぐきがはれるは、腫脹、(5) 歯がぐらぐらするは、動揺、(8) 歯ならびが悪くなったは、歯列不正、(9) 固いものがかみにくい、(11) 咀嚼障害、(10) 歯の間に食物がはさまるは、食片圧入、(11)

歳代 32.1%、30 歳代 23.7% であった (図 5)。
3. 主訴項目について
歯周疾患患者問題調査表の(1)~(12)が主訴項目に相当す

図 5 疾患の進行度と年齢

図 6 主訴項目の分布

口が臭いと思う、(12) 口が臭いと人に言われるは、口臭として検討した。

最も多かったのは、食片圧入で 80%、次いでブラッシング時の出血 72.0%、歯肉よりの出血 62.0%、動揺 52.5%、咀嚼障害 50.0%、自覚的口臭 44.0%、歯肉の腫脹 40.5%、排膿 19.0%、違和感 17.5% であった (図 6)。それぞれを年齢別でみると、歯肉の違和感、出血、腫

脹、咀嚼障害、食片圧入、他覚的口臭は、40 歳代前半、次いで 50 歳代前半の順で高かった。一方、自覚的口臭は、50 歳代前半が最も多く、次いで、40 歳代前半の順であった。歯列不正は、40 歳代前半の割合が高く、次いで、30 歳代、40 歳代後半から 50 歳代前半の割合が高かった (図 7)。主訴項目の男女差については、 χ^2 検定の結果、違和感 ($p<0.10$) 出血 ($p<0.10$)、自覚的口臭 ($p<$

図 7 主訴項目の年齢分布

図 8 主訴項目と疾患の進行度との関係

0.10) が、女性に多いという有意性が認められた。逆に男性に多いという有意性が認められたのは、咀嚼障害 ($p<0.10$)、他覚的口臭 ($p<0.10$) であり、他の項目については、男女差は認められなかった。

疾患の進行度との関係については、違和感、出血、排膿、動揺、腫脹、咀嚼障害、口臭（自覚的、他覚的）の項目に○印をつけた患者の 60% 以上が重度で、歯列不正、食片圧入の 50% 以上が重度であった（図 8）。 χ^2 検定の

図 9 習慣および嗜好品項目の分類

結果、違和感 ($p<0.05$), 出血 ($p<0.10$), 排膿 ($p<0.01$), 動揺 ($p<0.001$), 腫脹 ($p<0.10$), 咀嚼障害 ($p<0.01$), 自覚的口臭 ($p<0.01$) の項目が疾患の進行度との間に有意差を認めた。

4. 習慣および嗜好品について

歯周疾患患者質問調査表の(13)~(20)が習慣および嗜好品に相当し、それぞれ、片側咀嚼、口呼吸、歯ぎしり、つまようじの使用、喫煙、偏食、硬固物の摂取、甘味物の摂取として、検討した。

(16)つまようじの使用は、来院患者の 58.5%, (13)片側咀嚼は、52.0% と半数をこえていた (図 9)。それぞれを年齢別にみると、40 歳代前半と 50 歳代前半に多い傾向がある項目は、片側咀嚼、つまようじの使用、喫煙、甘味物の摂取で、50 歳代前半に多かったのは、口呼吸、硬固物の摂取で、偏食は、30 歳代後半に多く、増齢的に減少していった (図 10)。男女差については、 χ^2 検定により、女性に多いという有意差が認められたのは、片側咀嚼 ($p<0.10$), 甘味物の摂取 ($p<0.01$) であり、一方、男性に多いという有意差が認められたのは、喫煙 ($p<0.001$), 硬固物の摂取 ($p<0.10$) であった。疾患の進行度との関係をみると、重度の割合が、(19)硬固物の摂取、(20)甘味物の摂取を除き、すべての項目で 60% 以上であった (図 11)。 χ^2 検定の結果では、つまようじの使用 ($p<0.05$), 喫煙 ($p<0.05$) で疾患の進行度との間に有意差が認められた。

5. 過去における治療の有無について

歯周疾患患者質問調査表の、(2)今までに歯石をとってもらったことがある、(22)今までに歯ぐきの治療を受けたことがあるが過去における治療の有無に相当し、歯石除去、歯肉の処置を受けた既往の有無として検討した。歯石除去は、来院患者の 66.0% が経験しており、また、歯肉の処置を受けていたものは、29.0% であった (図 12)。年齢別でみると、歯石除去は、40 歳代前半、50 歳代前半が多く、歯肉の処置では、40 歳代前半で 27.6%, 30 歳代後半、50 歳代前半で、20.0% を占めていた (図 13)。男女差についてみると、 χ^2 検定の結果、歯石除去は女性に多く ($p<0.01$), 歯肉の処置は男性に多い ($p<0.05$) という有意差が認められた。疾患の進行度との関係をみると、歯石除去を受けた患者の 58.3% が重度、33.3% が中等度で、歯肉の処置を受けた患者の 69.0% が重度であった (図 14)。また、 χ^2 検定の結果、歯肉の処置を受けた患者は、 $p<0.05$ で疾患の進行度との間に有意差を認めた。

6. 口腔衛生観念について

歯周疾患患者質問調査表の(23)~(33)が、口腔衛生観念に相当し、それぞれ、ブラッシングの回数、歯ブラシの交換時期、さらにその他の口腔衛生観念として歯ブラシ購入時の硬度、特殊な歯磨剤の使用、補助用具の使用、ブラッシング指導の経験の有無を含み検討した。

ブラッシング回数については、(24)1日2回が最も多く 44.0%, 次いで(25)1日1回、(26)1日3回の順であった

図 10 習慣および嗜好品項目の年齢別分布

(図 15)。年齢別にみるとブラッシング回数にかかわらず、40 歳代前半、50 歳代前半の割合が高かった (図 16)。男女差については、 χ^2 検定の結果、1 日 1 回は、 $p < 0.001$ で男性に多く、1 日 2 回は、 $p < 0.001$ で女性、1 日 3 回は、 $p < 0.05$ で女性に多いという有意差を認めた。疾患の進行度については、1 日 2 回の患者の 61.9% が重度、1 日 1 回、1 日 3 回の患者の 50% 以上が重度であったが

(図 17)、 χ^2 検定の結果では、有意差は認められなかった。

歯ブラシの交換時期については、約 2 カ月位で交換するが最も多く 34.5%、次いで約 1 カ月位、約 3 カ月、約あまりしないの順であった (図 18)。年齢別でみると、1 カ月、3 カ月で交換している患者は、50 歳代前半、40 歳代前半が多く、2 カ月、あまり交換をしない患者では、

図 11 習慣および嗜好品項目と疾患の進行度との関係

図 12 過去における治療の有無項目の分布

図 13 過去における治療の有無項目の年齢分布

40 歳代前半が最も多かった (図 19)。男女別では、 χ^2 検定の結果交換時期との間に有意差は認められなかった。疾患の進行度については図 20 の通りで、ブラシの交換をあまりしない患者について、 χ^2 検定の結果、 $p < 0.10$ で有意差が認められた。

その他の口腔衛生観念として、 $\textcircled{20}$ 歯ブラシ購入時に、硬度に注意している患者は、来院患者の 54.5% と半数

をこえ、 $\textcircled{23}$ ブラッシング指導の経験者は 34.0% であった。一方、 $\textcircled{22}$ 補助用具使用者は、1.5% と少数であった (図 21)。年齢別にみると、硬度に注意している患者、ブラッシング指導経験者は、40 歳代前半、50 歳代前半に多かった (図 22)。男女別にみると、補助用具を使用している患者は、 $p < 0.05$ で女性に多いという有意性を認めた。疾患の進行度についてみると、重度の割合は、硬度

図 14 過去における治療の有無項目と疾患の進行度との関係

図 15 ブラッシング回数項目の分布

図 16 ブラッシングの回数項目の年齢分布

図 17 ブラッシングの回数項目と疾患の進行度との関係

図 18 歯ブラシの交換時期項目の分布

図 19 歯ブラシの交換時期項目の年齢別分布

図 20 歯ブラシの交換時期項目と疾患の進行度との関係

図 21 その他の口腔衛生観念項目の分布

図 22 その他の口腔衛生観念項目の年齢別分布

図 23 その他の口腔衛生観念項目と進行度との関係

図 24 来院可能回数項目の分布

図 25 来院可能回数項目の年齢別分布

図 26 来院可能回数項目と進行度との関係

に注意している者が 55.0%，特殊な歯みがき剤の使用者 75.0%，補助用具の使用者 33.3%，ブラッシング指導経験者 58.8% であり（図 23），特殊な歯磨剤使用者に χ^2 検定の結果，疾患の進行度との間に $p < 0.10$ で有意差

図 27 治療希望項目の分布

を認めた。

7. 治療に対する熱意について

歯周疾患患者質問調査表の④④～④⑥が治療に対する熱意に相当し，治療のための来院回数さらに，予防を含めた治療を希望しているか，悪い部位のみの治療を希望しているかの治療希望として検討した。

来院可能回数では，④④いつでも可能が来院患者の 47.0%，④⑥週に 1 回が 38.5% で，④⑤あまり通院できないは 6.0% であった（図 24）。年齢別にみると，いつでも通院可能，週 1 回通院可能な患者は，40 歳代前半，50 歳代前半に多く，週に 2 回通院可能，あまり通院できない患者は，40 歳代前半に多かった（図 25）。男女別にみると，

図 28 治療希望項目の年齢別分布

！ 38 ひどく悪いところだけを 39 予防も含め治療を受けたい
治したい

図 29 治療希望項目と進行度との関係

χ^2 検定の結果、あまり通院できない項目に○印をつけた患者に、 $p < 0.05$ で女性に多いという有意差が認められた。疾患の進行度との関係についてみると、通院可能回数が減少していくに従って、重度の占める割合が多くなっており（図 26）、 χ^2 検定の結果有意差が認められた。

治療希望項目については、㉔予防を含めた治療を希望している患者は、来院患者の 85.5%、㉔悪い部位のみを希望している患者は、10.5% であった（図 27）。年齢別にみると、悪い部位のみの治療を希望している患者では、40 歳代前半で 28.6%、50 歳代前半 19.1%、30 歳代後半、60 歳代前半 14.3%、予防を含めた治療を受けたいという患者では、40 歳代前半 26.3%、50 歳代前半 24.0%、30 歳代後半 12.9% であった（図 28）。また、男女差、疾患の進行度とについて χ^2 検定の結果有意差は認められなかった（図 29）。

考 察

来院患者の構成をみると、40 歳代、50 歳代、30 歳代の順で、男女別では、40 歳代がともに多く、男性では、40 歳代、30 歳代、50 歳代、女性では、40 歳代、50 歳代、30 歳代の順であった。これは、佐々木ら¹⁾、新谷ら²⁾の、31~40 歳代より急激に増加し最も高い割合を占めるのは 41~50 歳代であるという報告と類似しているが、われわれの結果では、ピークが同様に 40 歳代 (36.5%) にあるものの 50 歳代 29.0%、30 歳代 24.5% と、50 歳代と 30 歳代でそれほど差はみられず、年齢の分布という点で異なっていた。これは、新潟県の県民歯科疾患実態調査報告書³⁾ が述べているように、新潟県と全国の歯周疾患罹患率を年齢層別に比較すると、20~24 歳以下の年齢では、全国との差はほとんど見られないが、25 歳以上においては、すべての年齢で全国に比べ新潟県の方が高いという地域性のあらわれと思われる。

主訴項目については、食片圧入が来院患者の 80%、出血 44.0%、排膿 19.0%、違和感 17.5% であり、今川⁴⁾、佐々木ら¹⁾、新谷ら²⁾ とほぼ同様な結果を示した。しかし佐々木ら¹⁾ が口臭、咀嚼障害を主訴に来院した患者がわずかであると述べているのに対し、われわれの結果では、口臭、咀嚼障害を訴えている患者がほぼ半数を占めていた。上野⁷⁾ は歯科の主訴をもって来院した患者 518 名について、調べた結果、外来患者の 35% はある程度の口臭を有していると報告しており、さらに、口臭を有する 183 名について年代毎の割合を調べた結果では、9 歳以

下を最低に、以後増齢とともに口臭を有する者の占める割合は増加し、60 歳代の 69% を頂点として、70 歳代は急激に減少した値を示し、60 歳代の者は 10 歳代の 3 倍、20 歳代の 2 倍の値を示したと述べている。口臭を訴える患者は、潜在的に相当数認められることがうかがえる。年齢別にみると、歯肉の違和感、出血、腫脹、咀嚼障害、食片圧入、他覚的口臭、動揺は、40 歳代前半、50 歳代前半の順で高い割合を示し、自覚的口臭は、50 歳代前半、40 歳代前半の順であった。排膿は、30 歳代後半がピークで、以後、増齢的に減少しており、歯周疾患にともなう歯列不正は、40 歳代前半が高く、他の年齢層ではほぼ平均していた。一方、咀嚼障害、他覚的口臭は男性に多く、違和感、出血、自覚的口臭は女性に多かった。疾患の進行度との関係では、違和感、出血、排膿、動揺、腫脹、咀嚼障害、自覚的口臭に有意差が認められ、これらの項目に○をつけた者の 60% 以上が重度に属しており、疾患がかなり進行した状態で来院していることを示している。

習慣および嗜好品については、片側咀嚼、つまようじを使用するものは来院患者の 50% をこえていた。偏食は、歯周疾患患者のうちでは比較的若年層の 30 歳代後半に、また、硬固物の摂取、甘味物の摂取は、50 歳代前半に多かった。男女別では、女性に、片側咀嚼、甘味物の摂取、男性に、喫煙、硬固物の摂取が多かった。さらに疾患の進行との関係では、つまようじの使用者、喫煙者の間で有意差が認められ、新谷ら²⁾ の、甘い物は女性が多く摂取し、硬固物は男性が多く、喫煙は疾患が進行するにつれて多くなるという報告と一致していた。

過去における治療の有無については、歯石除去を受けたものは、66.0% であり、男女別にみると、女性に多く、一方、歯肉の処置を受けたものは、男性に多かった。また、歯肉の処置を受けたものは、疾患が進行するにつれて高い割合を示していた。

ブラッシング回数は、1 日 2 回、3 回、1 回の順で、また、ブラシの交換時期は 2 ヶ月、1 ヶ月、3 ヶ月の順であり、1 日 1 回は男性に、2 回と 3 回は女性に多かった。森田ら⁵⁾ は、歯周疾患罹患者と非罹患者との間で、主観的要素に差があるかどうかについて、 χ^2 検定を行っており、「1 日 2 回以上歯をみがく」、「歯槽膿漏の治療を受けたことがある」の項目について、歯周疾患の非罹患者の割合が有意に高いことを示し、新谷ら²⁾ は、疾患が進行するにつれてよく歯ブラシをすると述べている。一方、中久木ら⁶⁾ は、ある時点における刷牙回数と歯口清掃度とは必ずしも一致せず、有意の相関は認めたいと報告し

ている。われわれの結果では、歯ブラシの回数と疾患の進行度とは一致していなかった。

歯ブラシ購入時に硬さに注意している患者は、54.5%、ブラッシング指導経験者は、34.0%を占め、そのうち疾患の進行度が重度のものの割合は50%をこしており、また、進行している患者に、特殊な歯磨剤を使用する傾向がみられ、患者自身で自覚しているものと思われる。

治療希望状況については、予防を含めた治療を希望するものが85.5%であったのに対して、悪い部位のみを処置してほしいというものが10.5%を占め、地域性のためか、この割合を減少させる必要性を認識した。

結 論

昭和57年6月より昭和59年2月までの間に日本歯科大学新潟歯学部歯周治療科に来院し、慢性辺縁性歯周炎と診断された患者、男性100名、女性100名、計200を対象として、歯周疾患患者がどのような状態で来院するのかを、当科で使用している、歯周疾患患者質問調査表をもとに検討し、次の結果を得た。

1. 来院患者は、40歳代が多く、30～50歳代で90%を占め、疾患の進行度では、重度のものが約60%を占めていた。そして、軽度のものは30歳代が多く、中等度、重度のものは、40歳代が多かった。

2. 主訴では、食片圧入が最も多く80%を占め次いで、出血、動揺、咀嚼障害の順でこれらはそれぞれ50%をこえていた。男女差が認められた項目は、違和感、出血、咀嚼障害、口臭で、また、疾患の進行度と有意差が認められたのは、違和感、出血、排膿、動揺、腫脹、咀嚼障害、自覚的口臭であった。

3. 習慣および嗜好品については、つまようじの使用者、片側咀嚼のものが半数をこえており、片側咀嚼、甘味物の摂取、喫煙、硬固物の摂取では男女差が認められた。また、疾患の進行度と有意差が認められたのは、つまようじの使用者、喫煙者であった。

4. 来院患者の66.0%が歯石除去を経験しており、40歳代前半、50歳代前半のものが多かった。歯肉の処置を受けた患者は、29.0%であり、疾患の進行度との間には、有意差を認めた。

5. ブラッシング回数については、1日2回が最も多

く44.0%であり、次いで1日1回、1日3回の順であった。そして、1日1回は男性、1日2回、1日3回は女性に多かった。

6. 歯ブラシは2ヵ月で交換するものが最も多く34.5%であり、歯ブラシ購入時硬さに注意しているものは54.5%と半数をこえていた。また、ブラッシング指導を受けたことがあるものは34.0%で一方、補助用具の使用者は、全体の1.5%と少なかった。特殊な歯磨剤使用者と疾患の進行度との間には、有意差が認められた。

7. 通院はいつでもできるものは約半数近くを占め、予防を含めた治療を希望しているものは85.5%であった。

稿を終るに当たり、種々ご教示いただいた本学口腔衛生学教室、末高武彦教授ならびにご協力いただいた当科、平田美幸、山崎明子、浮須小百合衛生士に感謝致します。

文 献

- 1) 佐々木隆博，鈴木英雄，松村健三郎：歯周疾患の統計的観察 1，主訴からみた患者の実態について。日歯周誌，14：26～32，1972。
- 2) 新谷文子，中島美紀子，塩野宗則，大場浩二，新谷 高，中村治郎：歯周疾患患者の問診表の統計的観察。日歯周誌，24：165～174，1982。
- 3) 新潟県歯科保健医療対策委員会：新潟県県民歯科疾患実態調査報告書，1983。
- 4) 今川与曹：私の歯周病学教育をかえりみて。歯界展望，31：968～988，1968。
- 5) 森田 学，平岩 弘，鶴見真由美，坂田真理子，岸本悦子，渡辺達夫：職場における歯周疾患に関する健診及びアンケート調査。口腔衛生会誌，34：200～201，1984。
- 6) 中久木正俊，岸孝一郎，三宅次夫，飯沼政義，伊藤 忠：刷牙回数と歯口清掃度の相関。日大歯学，41：753～754，1967。
- 7) 上野 正：口臭と口腔疾患—その診断と対策—。歯界展望，25：439～445，1965。